

コロナ禍での日本の劇場・オペラ団体 ～関西二期会に聞く～

堀田 栄作 ((公社) 関西二期会事務局長)

石田 麻子 (聞き手 / 『日本のオペラ年鑑』 編集委員長)

2021年7月8日実施

ギリギリで実施できたオペラ公演

石田：新型コロナウイルス感染症が拡大した結果、主催公演、依頼公演がどうなったかをお話いただけますか。私が最後に関西に伺ったのが、2020年3月のびわ湖ホールワグナー《神々の黄昏》なのですが、その少し前に関西二期会さんによる2月22日、23日の《カヴァレリア・ルスティカーナ》《パリアッチ（道化師）》のダブル・ビルを観劇させていただきました。これは無事に2回公演できたのでしたね。

堀田：《カヴァレリア》はコロナの影響で国内ほとんどの演奏会が中止になる、ギリギリのタイミングで実施したオペラ公演でした。ギリギリと申し上げたのは、2月22日が本番初日で、ゲネプロがその2日前の20日だったのですが、そのゲネプロの2日前18日に大阪府知事が記者会見で「大阪府主催のイベントは原則中止」という発言をしたのを受けて「イベント中止って、オペラもそうかな？」と不安になったのを覚えています。

翌19日、府の対策会議で、3月20日までの府主催のイベントは原則中止と正式に決まり、この日に大阪府下の全市長が府知事と会談したらしいのです。それを受けて翌20日つまりゲネプロの日に、東大阪市文化創造館の渡辺昌明館長一すごくオペラに詳しい方なのですが「ちょっと、お話が…」と呼ばれて、「今から中止することって無理ですよ」と切り出され、「ここで中止する事は出

来なくはありませんが、これまでに費用がすでに発生しているので、それをご負担いただけるのでしたら…」と申し上げたら、「そうですね」ということで、市長にかけ合ってくれたようです。それで「やりましょう」となったのですが、本当にギリギリのところでした。

石田：その時は、まだコロナに対する対策なり、意識がわれわれにまだない時期でした。客席も定員100%で問題なく、歌手の方々も特にディスタンスも取っていませんでしたよね。

堀田：その通りです。

石田：なんとか滑り込みで上演できたということですね。満員のお客様だったように記憶しています。

堀田：はい。多くの方にいらしていただきました。僕はお客様のお出迎えをしていて、すぐにみなさんの顔を判別できていましたから、当時はマスクをされている方はいませんでした。

3月以降の状況

堀田：それ以降の状況ですが、6月にオペラ公演《リゴレット》を同じ東大阪市文化創造館で開催する予定があり、イタリアから演出家と指揮者を招聘する計画でした。来日の都合があったので既に練習計画も出来ており、チラシも刷り上がっていました。その間にびわ湖ホールの《神々の黄昏》が公演中止に

なったのは、もちろん知ってはいましたが、決定的に「どうしよう…」と思い始めたのが3月の中頃です。

イタリアの感染状況がすごく悪化して、港が止まってしまったのです。「港が止まったということは、大道具・小道具・衣裳や靴が入ってこないのでは…」と思い至り、あたふたし始めました。それがちょうどその時期です。

そうしたところで、先にイタリア側が出国禁止、移動禁止を決定したのです。日本は14日間の移動制限というだけで、入国自体はできる状況だったのですが、向こうが出国禁止になったので、「これでは指揮者も演出家も来日できないのではないかな？」となり、実際に練習ができなくなったことから、延期か中止の判断をしなくてはいけなくなりました。当時は年を超えるくらいにはコロナは収まるだろうという、楽観的な状況だったので、「まずは延期の方向で探ろう」と、12月以降にどこかホールや劇場に空きがないかと探したのです。当然なのですが、開催までに1年を切っていましたので、どこのホールも空いておらず、またオーケストラも1週間拘束することは難しく、「延期は無理だな」と中止を決めたのが、4月に入ってすぐのことだったと記憶しています。それで東大阪市の会館へも「上演できそうにありません」と伝えました。

石田：チケットは発売されていたのですか。

堀田：発売していました。すでにチケットを買われていたお客様の中で、「チケット代金の返金は要りません」「活動が大変でしょうから寄付します」と、お申し出になられた方も居られ「大変申し訳ない」と思いながらも有難く頂戴しました。

石田：文化創造館側にキャンセル料は払わなくてはいけなかったのでしょうか。

堀田：状況が状況なので、「なし」という事

でご対応頂きました。

石田：そうですね。歌手の方も準備されていたと思うのですが。

堀田：ええ。歌唱する準備はすでに出来ていました。ですが、こちらが判断を下すより先に歌手側から「開催出来ないのでは？」という意見が上がってきていました。関西は特にその傾向があるのですが、歌手は自分たちのファンにチケットを直接販売する率が高いので、お客様から生の言葉を聞けるのです。4月の感染状況で、お客様から心配する声が入ってきている様子で、「自粛の雰囲気広がってチケットを購入して頂けない。6月にオペラ開催というのは難しい」という歌手の声が私のほうに届いていました。

歌手達が多くファンをつかんでくるのは、各々が指導している合唱団なのです。岐阜の合唱団でクラスターが発生したという報道があり、合唱活動が出来なくなりました。それで合唱を通じてファンのみなさんにチケットをご購入いただけない状況になり、歌手から「お客様がいない」と報告を受けました。また、密を避けなければならなくなり、オペラの練習自体も不可能になってしまいました。

その後、夏を過ぎてから感染が少し収まったので、合唱活動は再開されたのですが、関西では冬には再び「医療崩壊」と言って良いレベルの、同じ頃の東京よりもひどい状況になりました。感染者数が増加し、医療が追いつかない状況で、「大阪では自宅療養中に亡くなる方がたくさん出ています」というニュースが、大きく報道されました。そうなると少し前くらいから、合唱はまた活動できなくなったのです。その状況は未だに続いていて、最近ではワクチンの接種率が上がり、少しずつ活動は再開されてはいるようですが、まだ止めているところも多いです。

石田：2020年度の主催公演は、今の《リゴ

レット》の他に、もう1公演、予定されていましたがよね。

堀田：10月に《ドン・ジョヴァンニ》を兵庫県立芸術文化センターで計画していました。兵庫県立芸術文化センターは、クラシックの公演を再開するために、7月の後半に劇場で実証実験をしたのです。「空調は問題なく換気できています」とか「マウスシールドとフェイスシールドの着用、合唱はこのぐらい間隔を空ければ大丈夫」という実験です。その時に兵庫県立芸術文化センターの担当者に、「これだったら、オペラはできるのかな？」という話をしたのですが、彼は「オペラはさすがに難しいのじゃないかな」との返事だったように記憶しています。本番だけではなく練習等も含めての考えだと思います。県の施設でもあり共催しているという立場から、彼は感染に関しては慎重で、また感染予防を徹底しなくては行けない立場でもありました。チケット発売時期が迫っていたのですが、この時に公演は無理だなと決断しました。

石田：主催のオペラ公演は昨年度2つとも中止になったということですね。

堀田：正確には中止と延期です。《リゴレット》は中止、《ドン・ジョヴァンニ》は、キャストやスタッフ、予定していたメンバーでそのまま延期にしました。ただ延期といっても年度を越えてなのですが、2022年3月に予定しています。《リゴレット》は、外国人の招聘が無理なので、指揮者・演出家を変更して、来年度に吹田市文化会館メシアターを会場に新しい企画で実施します。

石田：2020年度は、主催事業で行えたものは何かあったのでしょうか。

堀田：コンサートを11月と12月に開催しました。重唱や合唱ではなく独唱のコンサートでしたので、なんとか開催できました。

それらのコンサートは、クラシック音楽

公演運営推進協議会が6月に策定した「クラシック音楽公演における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」の指針を基に、座席を定員の半分に、それも市松模様状にして前後左右1席を空け、お客様に検温、手指の消毒、チケットをご自身でもぎっていただいで実施しました。舞台前の最前列3列はカットしました。このコンサートが2つ終わってから、「3m以上は飛沫が飛んでいない可能性が大」という歌の実験結果が発表され、「マウスシールドは実は飛沫が飛んでいる」ことが分かるようになりましたが、当時はまだその前の段階の時期でした。歌手はマスクもフェイスシールドもなしで歌唱しましたが、結果的にディスタンスは保たれていたと言えます。

石田：PCR検査はされましたか。

堀田：検温はしてもらったのですが、PCR検査はしていませんでした。練習1回だけで本番に臨み、1人が歌唱するだけで誰かと一緒に舞台上で何かをすることがなかったのが理由です。

会場は2回とも兵庫県立芸術文化センターの小ホールです。400名入るところに、半分の200名でチケットを販売したのですが、その200名分のチケットは全部売れました。しかし、実際に会場へ足を運ばれたのは60名程度のお客様だけでした。「チケットを買って歌手への応援はするけれども、ちょっと自分たちは行くのを控えようかな」というお客様が、半分以上おられたのではないかなと感じました。

石田：お客様の戻りが鈍いという実感はありますか。

堀田：全然戻っていないです。私が先日伺った在阪オケの定期でも、先だっでの東京の劇場でのオペラ公演でも、会場で「やはりお客様は戻っていないですよ」と、業界の仲間内で話になりました。東京も大阪も、このと

ころはだいたい座席数の4分の1ぐらいしか入っていないですね。

石田：11月、12月のコンサートの次というのは、何か予定はされていたのですか。

堀田：12月のコンサートが終わった段階で、先ほども申し上げたように大阪でたくさんの感染者が出て、チケット販売開始の告知さえできない状況になってしまい、今年の4月から5月に企画をしていたコンサートは諦めました。

石田：逆に、少ない座席数の中でわざわざ来てくださったお客様の反応というのは、どうですか。

堀田：「来てよかった」とか、「よくやってくれました」というような反応が大方でした。「久し振りに聴けて、改めて感動した」というような感想をおっしゃってくださる方もいらっしゃいました。ただ、お越しにならないお客様からは「家から出るということが怖い」という声や「なんでこんな時期にやるんだ」というお声も出演者に届いていたこともあり、4月と5月のコンサートは中止を決定した、ということもありました。

補助金について

石田：中止になった公演には、補助金を申請して認められていたものもあったと思いますが、それまでにかかった経費を補助金で補填することはできたのでしょうか。

堀田：文化芸術振興費補助金は《リゴレット》分について対象経費の規定分をいただきました。2018年の大阪北部地震の時にも、地震の影響で本番1週間前に会場が使えなくなったことがあり、公演を中止したのですが、その際もそれまでにかかった対象経費に従って補填いただいた経緯があり、その時と同じ対応をいただいています。

同じく文化芸術振興費補助金ですが、延期となった《ドン・ジョヴァンニ》は、早い段

階で中止を決定したため対象経費になるものがまったく無く、補填はありませんでした。印刷物や楽譜の購入、練習場所のキャンセル等、実際には対象外経費が既に支払われていたのですが、三菱UFJ信託芸術文化財団の方から、これらの経費について元々助成をいただく予定だった分を、「中止した公演も、かかった費用があったら申請してください」とおっしゃっていただけて、中止公演の赤字を補填して頂きすごく助かりました。

石田：それは良かったですね。11月、12月に実施したコンサートでは、コロナ禍に対する補助金などは利用されましたか？

堀田：J-LODliveを申請してしまして、これも助かりました。座席数を半分まで減らさないといけない状況だったので、収益が半分になるわけです。半分の座席分のチケットはほぼ売っていたとはいえ、座席数半分では収益も当然半分になるところ、J-LODliveで認められた額をいただけたので、実は赤字が全くなかったのです。むしろ、そのコンサートは、5～6万円ほどの黒字になりました。

それと、関西二期会の事務所の維持については、2020年の8月から9月ぐらいからは、全く事務所の仕事がない状況でしたので、1名だけが11時から16時までの5時間事務所に来て、あとは全員自宅待機という体制にしました。その分、雇用調整助成金をいただけて、人件費も赤字にはならず済みました。もちろん必要なことがあれば、携帯電話ですぐに連絡を取り合えるようにはしていました。

また、これは関西二期会のコンサートではありませんが、歌手個人の活動に対しての補助金として「文化芸術活動の継続支援事業」がありました。関西二期会の歌手の場合は東京二期会所属歌手とともに日本演奏連盟が最初の窓口になって、東京二期会所属歌手には山口毅事務局長が、関西二期会所属歌手については私が推薦状を書き、推薦状を元に連盟

が認めることによって提出書類が軽減されるという流れがありました。「かなり依頼が来るのかな？」と思っていたのですが、結局推薦状を書いたのは10件ぐらいなんです。別途個人で申請した歌手は5～6名程だった様子で、補助金を申請したのは関西二期会だとトータルで15～16名ではないかと思えます。関西二期会の会員数から割り出すと、おおよそ2%か3%くらいです。おそらく歌手は、その間、個人的な活動を控えていたのではないのでしょうか。先ほども申しましたように、合唱団で教えている人たちをお客様として呼べない状況では、活動ができなかったというのも背景にあるのでしょうか。

石田：個人の活動も低迷したということですね。

学校巡回公演

石田：そうしますと、昨年度の関西二期会の活動というと、この2つのコンサートのみということでしょうか。

堀田：他には、秋から文化庁の「文化芸術による子供育成総合事業」で、合唱の学校巡回公演を6校実施しました。これも訪問先の学校と相談して実施したのですが、一番広くステージから距離を取ったところでは、体育館の前半分ぐらいを空け、半分より後ろで子どもたちが鑑賞するスタイルにして、なおかつ体育館の窓は開け、歌手はマウスシールド、フェイスシールドをつけて演奏するという状態でした。

公演時間自体は短くはせずに、通常通り学校の2時限分、つまり1時限＝45分×2コマ分の90分でやっています。ただし子どもたちの人数によっては午前午後に分けて2回公演で実施しました。学校公演は子どもたちの健康第一ですので、取り止めになったところもありましたが、開催に踏み切った学校では、対策をしながら実施し、そのうちの1校では

先生から「実は4月以降になって今日、初めて子どもたちが歌唱します」とお聞きしました。もちろん、子どもたちはマスクをしながらで、一緒に小さな声で歌ってくれました。

石田：子どもたちはコロナ前と反応が違っていましたか。

堀田：私としては、歌っている時だけではなく、子どもたちと触れ合うとか、終わった後に握手をしながら「どうだった？」と聞いて回るような、そういう前後の時間がとても重要だと思っています。そこで実際に子どもたちの反応から感想と様子が分かるのです。それが今回はディスタンスを取って触れ合えない状況でしたので、とても残念な事に、率直な子どもたちの感想を読み取れなかったです。ただ、歌っている時の様子を見ると、子どもたちはそれまでずっと歌っていなかったもので、久しぶりの音楽というものを喜んでいるのはよく分かりました。

石田：学校側から受け入れにあたっての条件は、通常より厳しくなっていましたか。

堀田：そうですね。具体的な条件提示は無かったのですが、学校公演直前の水害で大きな被害があった地域に近い学校に何う事になり、歌で暗い雰囲気を変えたいとの思いで訪問しました。校長先生がバスまで迎えに来て最初に「大丈夫ですか？」とおっしゃるんです。それは、「みなさん、体調悪い人はいないですよ？」という意味でした。その地区では、誰一人として感染者が出ていない状況の中、感染者が多い大阪からやって来たということで、校長先生も実施する責任を感じて思わず最初に確かめたのだと思います。私も絶対に感染者を出してはいけないという強いプレッシャーを感じて公演を実施しました。

私どもの話ではないのですが、在阪のとあるプロオケでは、学校公演を予定していて、「明日、行きますのでお願いします」と学校に確認の電話を入れたのですが、夜になって

学校から「やっぱり中止します」と電話がかかってきたということもあったようです。どちらも同じ状況で学校もギリギリまで判断が難しかったのだと思います。

2021年の状況

堀田：子どもたちとの共演では、2021年の話になりますが、灘区民ホールとの共同サロンオペラ《サウンド・オブ・ミュージック》も、やはり出来ませんでした。1月9日、10日に開催する予定で、演奏会形式のようなスタイルでやる、と企画まで立てたのですが、大阪の感染状況が悪化していき、かつ子どもたちと一緒に企画だったので、会館の担当者と「これは無理だよ」と、諦めました。石田：2021年だと大阪国際フェスティバルの《泥棒かささぎ》も中止になってしまいましたね。

堀田：あのタイミングは大きな衝撃でした。大阪のフェスティバルホールが会場でしたが、大阪府が「土日のイベントは無観客で」と決定したのです。6月5日の土曜日が公演日で、大阪府の決定が、ほぼ1週間前の5月28日。平日の夜であれば、21時まで公演開催が可能なのですが、土日は無観客と決まったので、諦めざるを得なかったというところですね。入場者数も絞り、ディスタンスも取って練習をしており、対策是相当行っていました。ずっとマスクをつけながら練習を行い、PCR検査もやろうという矢先にあの発表があり、主催の担当者とともに悔しい思いをしました。

2021年度の状況としては、関西二期会の本公演であるヴェルディ《オテッロ》は、11月後半の予定ですので、今関係者とやり取りを始めたところです。今回は、指揮者・演出家ともイタリア人のため、今の段階では来日できるかどうか分からないのです。ビザの新規申請受付ができない状況で、万一指揮者が

来られなかった時のために、日本人指揮者の柴田真郁さんを、本番前の10日間仮押さえして、指揮者の確保をしています¹。

演出家も外国人ですが、今は舞台装置と衣裳についてやり取りをされていて、装置は日本で造ろうということで、図面をもらったところです。舞台に関しては出来るのですが、問題は演出です。演出家には「演出プランを予め演出助手に詳しく伝えてほしい。万一、来日できなかつたら、カバーは演出助手にしてもらう」と伝えてあります。加えて、リモートでの演出の可能性も考えて、前の日の練習の様子を全部映像に収めて送っておくとか、あらゆる手をフル活用して、来日できない可能性を念頭に置きつつ進めています²。

現在まん延防止期間中ですが、お客様へのチケット販売は、まん延防止や緊急事態宣言が大阪に発出されると、自治体の判断に基づくため、メシアターでは収容定員の半分しかチケット販売が出来ないのです。11月公演なので、8月初旬にはチケット販売を開始すべく、会館とやり取りしているのですが、現在は座席数半分でチケットの販売を開始しないといけないという状況です。途中から全席販売できる状況になったとして『『チケットあります!』と宣伝は出来るけれど売れない』という様な状況がギリギリまで続くと続きます。関西歌劇団も9月にメシアターでのオペラ公演を控えていて、お互い「大変ですな」と声をかけ合っています。やはり、チケットが最初の段階で半分しか売れないというのでは採算が合いません。かといって、チケット料金の値上げ設定は難しいと思います。

¹ その後も入国規制が続き、予定していたグイード・マリア・グイードは来日できず、公演は柴田真郁が指揮した。

² 演出家のパオロ・パニツァも来日出来ず、演出助手と連絡を取りながら演出を行った。

感染対策について

石田：先ほどPCR検査のお話が少し出しましたが、公演に当たっての感染対策は、どのようにされているのでしょうか。

堀田：PCR検査は、今後の公演については全て行うように考えています。練習開始の前に一度PCR検査をし、そこから毎日、体調のチェックと検温の記録をつけてもらい、どこかのタイミングでもう一度PCR検査を、と2回行わなくてはいけないと考えています。2021年11月の公演と、10月に2回と12月に1回、関西歌劇団と一緒に「アートキャラバン」事業で実施する《アドリアーナ・ルクヴルール》も、そのように考えています。

石田：稽古場での具体的なコロナ対策はどうされていますか？

堀田：関西二期会の練習場に、2020年6月、とても大きな熱交換器というか、空調設備が入りました。15分に1回、100㎡換気できるという性能で、ここの練習場だと「50人の歌手が入って、15分で空気が全部入れ替わる」というものです。

またマウスシールドが駄目だという事が分かりましたので、練習では必ず不織布のマスクを着用し、プラスして、1人でも動かせる透明のパーテーションを8台買いました。それを間仕切りとして置きながら、《泥棒かささぎ》の練習はやっていましたが、今後も踏襲しようと考えています。

石田：公演会場に入ってから対策はどういう形になるのでしょうか。

堀田：まず「不織布のマスクは絶対外さない」というのは一つです。これが一番の感染対策になるためです。また、楽屋内の座席配置を考えなければなりません。ホールとの打ち合わせでは、「半分の数にする。例えば5名用の楽屋ならば、3名は無理だろうから、2名にする」とか、そういう対策を取っています。あとはやはり、ディスタンスを取りなが

らどうやって演じるかということ、演出家が懸命に考えてくれています。そのため、演出が少しびつな形にはなるのですが、それはやむを得ません。

石田：ピットに入ってもらおうオーケストラの対策はどうでしょうか。

堀田：オーケストラは舞台上からの歌唱時の飛沫に恐怖を覚えていると思います。公演予定のホールは、オケピットと舞台の間にエアーカーテンのような、下から上に風の流れます。また舞台の先端から3m内側に入るところを先頭にして、それより前では歌手は歌唱しないということを徹底しています。

今後の資金調達について

石田：先ほど、補助金の活用のお話は伺いましたが、ファンディングなど、今後に向けての資金調達はどのようにお考えになっていますか。

堀田：ファンディングに関しては、これは関西だからかもしれませんが、「オペラをやりたいからお願いします」では、まず集まらないと考えています。やりたい事がどのように社会に還元できるのかを具体的に示す必要があり、例えば「子どもたちがオペラや舞台の公演をやりたい」ということが前提にあり、それに団体が協力する形でしたら、寄付を考えてくれる方はいらっしゃると思います。今のところ、具体的にファンディングの活用は考えておりません。今年度の資金調達の見込みですが、2021年はオペラを実施する予定ですので、「お客様の戻りが悪いので赤字は免れないな…」、「運営資金はどうしようか…」と不安が頭をよぎっていました。助かったのが「ARTS for the future!」事業です。採用いただけましたので、コンサートで若干利益が出ると見えています。

加えて今度の「アートキャラバン」事業

も、10%を一般管理費として計上してもいいということでしたので、予算に計上しています。その通りに運べば、今年度は乗り越えられると目論んでいます。

公演配信について

石田：関西二期会としては、映像配信に向けて何かお考えですか。

堀田：2020年11月と12月のコンサートは、J-LODliveの補助金があったので、公演をYouTubeでも流したのですが、それぞれ再生回数が4,300を超えて、「こんなに見てくださるのか」と少し驚きました。会員が個人でYouTubeの配信もしていますが、それほど回数は伸びていないようです。

石田：オペラ公演についてはどうでしょう。

堀田：先の2つのコンサートはJ-LODliveがあったので強引に納得してもらったところがありますが、アーカイブになると、歌手は、自分の歌が十分歌えていたら良いのですが、上手く歌えていないと「嫌だ」という人がいます。それに、オペラになると、オーケストラに許可を取らなくてはいけなくなり、別途費用が発生するということがあります。また、編集がどこまでできるのかというのも問題です。例えば、歌手が本番で「この上のCを聴かせたかったのが出なかった」ということがあった場合、それをリハーサルで録ったものに差し替えていいのかどうか、時間が経って自分で数度映像を見てから納得がいかず「やっぱり人に見てもらうのは嫌だ！」となった時に、すでに配信してしまっていたら……。そのあたりは今、議論中です。事務局としては、お客様のためにも公開したいのですが、歌手側からNGが多いのが今のところの懸案事項です。

関西の状況を見渡して

石田：堀田さんからご覧になって、昨年から

今年にかけての関西の状況を概観すると、どのような感じですか。

堀田：オーケストラも同じですが、定員の半分までとか、あるいは全部お客様を入れていいですよとなっても、お客様が戻ってきていないというのが実感で、4分の1どころか、もう少し低いかもしれません。大阪では一度、医療崩壊のようなひどい状況になりましたから、そこに敏感になるお年寄りの方とクラシックの愛好家は、いわゆるオペラやオーケストラのお客様でもあり、お客様の数が戻っていない最大の原因ではないかなと思っています。東京の感染者数よりも大阪のほうが多くなって、みなさんとてびっくりしたのでしょうか。府知事がいつもTVに出て、「医療崩壊しています」「もう、感染者を病院に入れることができません。今日はこれだけの人数が亡くなりました」などの報道が流れていました。そうすると「万一、感染した時に治療が受けられるか分からない」と余計に怖くなったのではないのでしょうか。

石田：関西には小規模のオペラ団体もいくつかあると思いますが、ご存じの範囲で、その辺りの団体の動向はどうでしょうか？

堀田：今のところ、小規模なものも全て止まっています。関西二期会の会員によるユニットやグループも同様です。2021年9月に初めて、「小規模のオペラをやりたい」と後援依頼が来たのが、唯一かなという感じでした。歌手のリサイタルも、先ほども言いましたように、本人がやりたくても、お客様が二の足を踏んでいるというところなんです。個人で開くリサイタルは、各々が常日頃コンタクトのある方に向けてのコンサートですので、お客様の健康を心配して、「それでコロナに罹ってしまったらどうしよう」というのが先に立って、できないのではないかと思います。

石田：今後に向けて、何か要望がありますか。

堀田：やはりワクチン接種を早くなんとかしてほしいですね。私が住んでいる神戸では、ワクチンが不足して届かないからと、一度受け付けた予約を全部キャンセルするということがあって困りました。特に出演者の接種の計画が崩れると9月、10月に開催しようと思っている公演ができなくなってしまいます。東京では文化芸術団体での職域接種のような話を聞きますが、関西では今のところ

そういう動きがないので、会員には、住んでいる地域の自治体での接種をお願いするしかありません。それも強制はできないですからね。打っていただけると、いろいろ出来るのですが、という感じです。

石田：ワクチンの接種体制も、東京と関西とは違うのですね。本日はどうもありがとうございました。